

街の女マギー

ステイブ・クレイン作

牧草 泉

五.

マギーは泥濘に咲いた一輪の花だった。彼女はひなびた住宅街から生まれた唯一の素晴らしい創造物だった。マギーはとてもすてきな少女だったのだ。

彼女の性格にはラム横丁の汚れは何一つ紛れ込んではいないようだった。上の階や下の階の賢人たちはいうに及ばず同じ階の偏屈人もそのことが不思議でならなかった。

マギーは子供の頃、街路で同じ腕白たちと遊んだり争ったりした。マギーはいつも、垢にまみれた汚い格好をしていた。煤けた服を着て薄汚れた姿をしていたので、誰もマギーとは見分けがつかなかった。

しかし、近所の若者たちが、「あのジョンソンの娘ったら、可愛いじゃん」と、言うことも一度や二度ではなかった。この頃になると、兄はマギーに言ったものだった、「マギーよ、このままじゃあ地獄行きだ、それが嫌なら働

くんだ」マギーは、地獄には行きたくなかったので、働くことにした。

偶然、マギーはカラーとカフスを製造している会社に就職できた。作業場でマギーは椅子とミシンをあてがわれた。その部屋には、二十人の女の子が働いていたが、その表情は不満げだった。

マギーは椅子にちょこんと座って朝から夕方までミシンを踏んでカラーを作った。そのカラーはブランド名とは似ても似つかぬお粗末なものだった。マギーは夜になると母のもとに帰った。

ジミーは大きくなり、曲がりなりにも一家の主となった。そんな立場に立ったからか、彼は父親がしてかしていたと同じように夜遅くふらふらしながら二階に上がってくるのだった。そうして親戚の者たちをのしつたり、床の上でごろんとそのまま寝てしまったりした。

マギーの母はというと、顔見知りの警察判事と口論するほど名前が知られるようになっていった。裁判所職員たちは彼女を愛称で呼んだ。メアリーが現れると、例によっていつものとおりだった。「おや、メアリーじゃないか。またやって来たのかい？」メアリーの灰色の頭はあちこちの裁判所で見ることができた。メアリーはいつも、口達者に言い返したり、説明したり、弁解したり、哀願したりして、裁判官をたじたとさせた。

メアリーの真つ赤になった顔とくるくるまわる目は島では名物となっていた。彼女は酒盛りをすることで、時間を知らのだった。そしていつもぶくぶく太っていて、だらしない服装をしていた。

ある日、若者のピート（少年の頃デビッドどおりの悪童の後頭部を殴って、友人であるジミーの喧嘩相手を追っ払ったことがあった）が、気取った格好で現れた。彼はいつだったか街でジミーと会って、ウイリアムズバーグで行われるボクシングの試合に彼を連れて行く約束をしていたのだ。それで夕方彼のところにやってきたのだった。マギーはピートをまじまじと見た。

ピートはジョンソンの家に行くと椅子に座って無関心を装って格子縞のズボンをはいた足をぶらぶらさせていた。その格好は誘惑的だった。縮れ髪は額に垂れ下がりが、オイルでかてか光っていた。獅子鼻は、短くワイヤーのようなぼさぼさした口髭を圧迫しているように見えた。ブルーのダブルの上着は、黒色のモールで縁取りがしてあり、赤いふわとしたネクタイの傍までボタンがついていた。履いている靴はエナメル靴でまるで殺し屋の武器のように見えた。彼のしぐさからは、彼はあたかも自分だけの優越感を持っている人物のようだった。

彼の眼差しには周囲に対する優越感と軽蔑が同居していた。彼は世慣れ人のように左右に手を振って、神を信じた

り深く考えることを嫌がって、「ばかばかしい」と言っただけのけた。

彼は確かにあらゆることを経験してきた。そうして唇をひん曲げて、それって無意味だと断言した。マギーは思ったのだった、「彼って、とてもエレガントで優雅なバーテンドーなんだ」と。

彼はジミーにいろいろ話を語り聞かせた。

マギーは半分目を閉じたまま、なんとなく興味を持って、ひそかに彼を観察した。

「ちえっ、嫌になるね！ うんざりだ」彼は言った。「一日も欠かすことなくやってきて、店を始めようとするんだから。見てくれよ。でも、奴らはすぐに追い出されるんだ。すぐにでも追い出してやるさ。奴らは右往左往するだけだろうよ。そうだろう？」

「本当だよな」とジミーがあいづちを打った。

「つい最近も変なごろつきが、ふらりとやってきて店を自分のものにしてよなんて素振りを見せるんだからな。このくそつたれめが！ 店を掠め取ろうってんだ。酒を飲んでたんだよ。相手するのはごめんだったから、奴に言ったんだ。『出て行ってくれ、面倒は起こさないでくれ』ってね。ううん？ こんな按配にさ。『出て行ってくれ、面倒なこととはごめんこうむる』とね。このようにだよ。『出て行くんだよ』ってさ。わかったかい？」

ジミーは、納得顔で頷いた。ジミーの表情には、自分が同じようなトラブルにあったとき、うまく対処する勇気があることを示したいという思いが表れていた。ピートはジミーを無視したように話し続けた。

「そうしたらね、そいつが言うんだよ、『なんだっ、変なこと言うなって！ 俺はトラブルメーカーじゃないんだぜ』ってね。いいか？ こんな具合さ。『実はな』って奴が言うのさ、『俺だっつれつきとした市民だぜ。いっつばい飲みたいただけなんだ、今すぐにね』、わかるかね？ こんな具合なんだ、『何言っつてんだ！ このバカやろう』と、俺は言っつてやったよ。こんな風にね。『何だ？ ふざけるな』ってね。わかるだろう？ 『トラブル起こすなよ』ってね。そう言っつたらね、そいつ、そしたらだね、わかるだろう？ おい！」

「そのとおりだよ」ジミーは繰り返した。

ピートはなお話し続けた。「そしてだな、俺はカウンターを飛び越えてさ、思いっきりぶつたたいてやったんだ。痛快だろう？ うん、そしたら、あの野郎、カウンターのガラスの向こうから痰壺を俺に投げつけやがったんだ。そうよ、俺は死ぬかと思っつたよ。でもさあ、ボスがさあ、すぐ来たんだ。そして言うんだ、『ピート、お前よくやったぞ。ちゃんと店のしきたりを守ったんだから、それでいいんだ』って。ボスが言っつたのはそれだけさ」

二人は喧嘩のことをいろいろ言い合った。

「あいつつて格好つけやがって」ピートが最後に言った。「でもあいつつて、初めからいちやもんつけなきやよかつたんだよ。俺はあいつらに言っつたんだ、『いいか、ここに来て、トラブル起こすな』ってさ。こう言っつたんだ。『トラブル起こすなってことよ、いいな？』ってね」

ジミーとピートが自分の強さを自慢しあっているとき、マギーは日陰で壁に寄りかかっていた。マギーの目は驚嘆の眼差しというより物欲しげにピートに注がれていた。壊れた家具類や汚い壁、家の汚れや混乱が急にマギーの前に現れて迫ってきた。

ピートの貴族的な容姿が泥にまみれるかのように思われた。マギーはピートを凝視したが、時々、ピートが自分を軽蔑しているのではないかと思っつたりした。

しかしピートは昔の思いに耽っつているように見えた。「このやろう」、彼は言っつた。「俺は簡単にはいかねえぞ。俺があいつらを街から追っ払うことだっつてできるっつてことは、あいつらだっつて知っつてんだ」

彼が「何だ、なんだっつてんだ」と言っつたとき、彼の声は運命に対する軽蔑と、宿命によっつて堪えねばならない何かに対する蔑みに彩られていた。

マギーはそこに男の美の極致があることを知っつた。マギーのぼんやりした考えは、神のお告げのように、小高い丘

が朝になると唱和するはるかかなたの土地を求めて彷徨うことがあつた。マギーの夢の中の庭に繁茂している木の下では、恋人がいつも散歩していた。

